

女性著者による新書版図書館書籍『つながる図書館』『走れ！移動図書館』の刊行
と 2014 年の図書館界

文学部日本語日本文学科・教授
佐藤 毅彦

1. はじめに

新書版の図書館関係書籍は、これまでに一定程度刊行されてきているが、内容が、図書館利用法指南的なもので、著者が「全国図書館大会」「図書館総合展」などに講演者・パネラーとして招聘されているケースとして、井上真琴『図書館に訊け！』（ちくま新書、2004）1)、千野信浩『図書館を使い倒す』（新潮新書、2005）2)をとりあげて検討した。3)また、新書版の図書館関係書籍で、女性著者によるものとしては、日本の公共図書館が多くの市民に利用されるような状況になる前の時期 4)に刊行された、石井桃子『子どもの図書館』（岩波新書、1965）5)の存在が知られていた。その後、辻由美『図書館で遊ぼう』（講談社現代新書、1999）6)、菅谷明子『未来をつくる図書館』（岩波新書、2003）7)などが刊行され、それぞれの時代において話題をあつめてきた。

2014 年 1 月、同一の発行日（1 月 10 日）で、おなじ出版社（筑摩書房）から、女性著者による新書版の図書館関係書籍、猪谷千香『つながる図書館』（ちくま新書、2014）8)、鎌倉幸子『走れ！移動図書館』（ちくまプリマー新書、2014）9)が刊行された。これらの著書は、一般の新聞・雑誌にもとりあげられ、2 人の著者は、2014 年を通して、様々な場面で図書館に関係する発言を行ってきた。それぞれの著者の経歴や著書の内容は、すでに広く知られていると思われ、ここでは、著書に対する反応と、図書館界での受け止められ方について、検討した。

注)

- 1)井上真琴『図書館に訊け！』筑摩書房（ちくま新書）、2004
- 2)千野信浩『図書館を使い倒す ネットではできない資料探しの「技」と「コツ』』新潮社（新潮新書）、2005
- 3)佐藤毅彦「図書館利用法指南本の系譜とその図書館観 その 1 新書版図書館利用法指南本『図書館に訊け！』『図書館を使い倒す』のケースについて 図書館はどうみられてきたか・9』『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.44、2008.3、pp.1-13
- 4)たとえば、『図書館年鑑 2014』p.307、「公共図書館統計」で 1967 年の個人貸出点数は、約 922 万点であり、2013 年の約 6 億 92 百万点の 70 分の 1 程度である。
- 5)石井桃子『子どもの図書館』岩波書店（岩波新書）、1965
- 6)辻由美『図書館で遊ぼう 知的発見のすすめ』講談社（講談社現代新書）、1999
- 7)菅谷明子『未来をつくる図書館 ニューヨークからの報告』岩波書店（岩波新書）、2003
- 8)猪谷千香『つながる図書館 コミュニティの核をめざす試み』筑摩書房（ちくま新書）、

2014.1.10

猪谷千香は、後にふれる、鎌倉幸子とのトークイベント（2014年6月25日）で、「私たち、同時にお互い図書館の本が出ることを知りませんでした」と発言している。

(<http://sva.or.jp/wp/?dialogue=4-1>)

9) 鎌倉幸子『走れ！移動図書館 本でよりそう復興支援』筑摩書房（ちくまプリマー新書）、2014.1.10

なお、これらの女性著者の世代については、「第2回 LRG フォーラム 菅谷明子×猪谷千香 クロストーク」の開催に関する「ACADEMIC RESOURCE GUIDE」のHPにおいて、「菅谷明子 1963年生まれ」「猪谷千香 1971年生まれ」と記載されている。

(<http://www.arg.ne.jp/node/7522>)

また、『走れ！移動図書館』のカバーに「鎌倉幸子（かまくら・さちこ）1973年青森県生まれ」と記載されている。

2. 新聞・雑誌の書評とインタビュー

『つながる図書館』は、刊行後、約一か月経過した時点で、『朝日新聞』2月16日「文庫・新書」で、「副題『コミュニティの核をめざす試み』は、どれも訪ねてみたくなった」1)と、『読売新聞』2月16日「本よみうり堂」で、「こんな図書館がちかくにあったら」2)と、紹介された。『毎日新聞』では、3月2日朝刊一面のコラム『余禄』で、「職場の目と鼻の先にある公共施設がこんなに変貌しているとは、うかつにも気づかなかった」3)という書き出しでとりあげられた。著者のインタビューやコメントも、『新潮 45+』4)、『東京人』5)などの一般誌や、季刊誌『図書館の学校』6)に掲載されている。

出版界や図書館の専門誌でも、『出版ニュース』7)、『図書館界』8)に書評が掲載され、『みんなの図書館』2014年5月号では、「小特集 書評『つながる図書館』」(pp.32-38) 9)が組まれた。また、季刊図書館批評誌『談論風発』10)や、「北の文庫の会」(札幌)が刊行(年刊)する『北の文庫』11)にも、『つながる図書館』を扱った文章が掲載され、web上でも、多くの言説がみられた。12)これらの大半は、好意的に内容を紹介しているが、一部に、疑問点を指摘しているものもある。

『走れ！移動図書館』の著者、鎌倉幸子については、刊行前にインタビューが、『AERA ウィズ・ベビー』13)に掲載され、刊行後には、自らパネリストとなった、映像情報メディア学会での、発表時の資料(パワーポイント)が公開されている。14)

『走れ！移動図書館』については、『読売新聞』15)、『出版ニュース』16)、『みんなの図書館』17)に書評が、季刊誌『図書館の学校』18)には著者のインタビューが掲載された。東日本大震災後のきびしい環境のもとで、移動図書館による実践を展開した活動記録に対して、『本でよりそう復興支援』の記録であるとともに、図書館という人間文化の神髄を語った名著である(嶋田学『出版ニュース』)、などと評価されている。

注)

- 1) 「文庫・新書」猪谷千香著『つながる図書館』『朝日新聞』2014.2.16（朝刊）、p.13
- 2) 「本よみうり堂 記者が選ぶ」猪谷千香著『つながる図書館』『読売新聞』2014.2.16（朝刊）、p.13
- 3) 「余禄 職場の目と鼻の先にある公共施設が…」『毎日新聞』2014.3.2（朝刊）、p.1
- 4) 「インタビュー 猪谷千香」『新潮 45+』2014.6、pp.309-310
- 5) 文・猪谷千香「東京点画 図書館でつながる本の生態系」『東京人』no.339、2014.5、p.7
- 6) 取材・文/品川裕香（教育ジャーナリスト）「変わりゆく公共図書館の実態を追う インタビュー 猪谷千香さん」『図書館の学校』2014 春号、pp.48-49
- 7) 嶋田学（瀬戸内市新図書館開設準備室）「ブック・ストリート 図書館 図書館にまつわる二冊の新書 前編」『出版ニュース』2014 年 3 月上旬号、p.18

文末では「現下の図書館の諸相を描いたものとして、本書は出色の一冊である」としているが、「惜しむらくは、メインタイトルでもある『つながる』という表象が図書館においていかなる人間的な営みとして生起するののかについての検討が充分ではない」「街づくりというものについての考え方や、そこに寄与する図書館のあり方について、著者の考え方は姿を現さない」と述べられている。

山本昭和「ブックハンティング 2014 猪谷千香著『つながる図書館』」『出版ニュース』2014 年 3 月中旬号、pp.24-25

この記事では、「華やかな面だけでなく、負の面も含めて公平に紹介しているか」「論争となる点について、どの方策がよいと考えるのかを著者がはっきりと示さない」「評価基準として、集客力や経済効果に注目しすぎ」「公共図書館が教育機関であることにも触れられていない」「無料貸本屋」という言葉を安易に使っている、などが疑問点として、指摘されている。

8) 石井莉乃（大学図書館勤務）「書評 猪谷千香著『つながる図書館』」『図書館界』vol.66、no.3、2014.9、pp.236-237

9) 「小特集◆書評『つながる図書館』」『みんなの図書館』no.445、2014.5、pp.32-38

編集部「小特集にあたって」p.32

高橋真太郎「オリジナリティで光り輝く図書館」pp.32-34

蓑田明子「ワクワクするより、終始、ザワザワ感で読んだ」pp.34-35

福富洋一郎「図書館はつながるか？」pp.36-37

吉田倫子「“天動説”に陥らないために今、読むべき本」pp.37-38

10) 『談論風発』vol.9、no.1、2014.5

加藤ひろの「『つながる図書館』の論調よりも丁寧に考えるべきこと～図書館として大切にすべきことは何か」pp.1-9

田井郁久雄「『つながる図書館』と「(図書館) 無料貸本屋」批判」pp.10-14

「無料貸本屋」という言葉の「意味の曖昧さ」を指摘し、「課題解決型図書館の対立概念ではあり得ない」とする。『つながる図書館』においても、「話題性のある図書館を目立

たせるための言葉として、意味内容の検証もしないで使われている」と批判している。

11)土屋直之「図書館とコミュニティアニズム：『つながる図書館』批判『北の文庫』vol.60、2014.11、pp9-20

タイトルに『『つながる図書館』批判』とあるが、同書にふれている部分は、さほど多くはない。「ここ10年ほどの図書館界の動きのなかで目立ったものを羅列的に彫り上げた本」で、「記述内容」や「事例の選択に」「特に基準めいたものは感じられない」。「図書館に関する予備知識のない一般の読者が最近の図書館界の動きを知るにはむしろ良書であるといえる」。「各事例は羅列的であり背景にバックボーンとなる思想やポリシーが全く読み取れない」。「著者は図書館界の人ではないので、取材者・観察者として、外部から見た図書館のありのままを伝えたに過ぎない、と」著者は主張するかもしれないが、「こういった羅列的な成果物がいったん世に出てしまい、それに対し業界として無批判となると、事実上」「図書館界全体の現状を追認する効果を生むことになる」(p.13)と、述べている。

12)たとえば、古書関係にくわえて、図書館関係の記述内容も多い「古本おもしろがりずむ：一名・書物蔵」(<http://d.hatena.ne.jp/shomotsubugyo/>)では、「読了本『『つながる図書館』』(2014.1.14(火))で紹介し、「nozomimatsuiのみたもの・きくもの・よんだもの」2014.01.

11 (<http://d.hatena.ne.jp/nozomimatsui/20140111>)へのリンクが示されている。

13)「インタビュー 子どものために働くひと 18回 シャンティ国際ボランティア会 鎌倉幸子 1冊の本が、一生の支えになることもある。被災地を走る「移動図書館」で、子どもたちに心の栄養を運んでいます。」『AERA ウィズ・ベビー』2013.2、pp.91-93

14)鎌倉幸子「走れ東北！移動図書館プロジェクト（アントレプレナー・エンジニアリング合同シンポジウム 震災から3年が過ぎて見えてきたこと パネル復興に向けて）『映像情報メディア学会技術報告』vol.38、no.19、2014.5、pp.71-86

15)評・石田千「探したい本がここに 『走れ！移動図書館』鎌倉幸子著『読売新聞』2014.3.9（朝刊）、p.12

16)嶋田学（瀬戸内市新図書館開設準備室）「ブック・ストリート 図書館 図書館にまつわる二冊の新書 後編」『出版ニュース』2014年4月上旬号、p.18

17)奥山智靖「ほん・本・Book 『走れ！移動図書館』鎌倉幸子著『みんなの図書館』no.446、2014.6、pp.65-66

18)取材・文/品川裕香（教育ジャーナリスト）「被災者の心の回復を願い、立ち上げた移動図書館プロジェクト インタビュー 鎌倉幸子さん」『図書館の学校』2014夏号、pp.44-45

3. トークイベント・対談など

猪谷千香、鎌倉幸子、の両者によるトークイベント「図書館のこれからを語る」が、2014年6月25日に、紀伊國屋書店新宿本店8階イベントスペースにおいて開催され、その記録は、鎌倉幸子の所属先である「シャンティ」のHPで公開されている。1)

猪谷千香は、出版までの経緯について、「きっかけは東日本大震災」後の状況の中で、「図

書館を取り戻そうという活動」を「取材したい」と感じたことをあげ、それまでもジャーナリストとして取材するなかで、この 10 年くらい『静かで本の貸出だけ』の図書館とは大きくイメージの違う図書館が生まれていました」と述べている。猪谷千香は、鎌倉幸子の問いに対して、どのように図書館を選んだかについては、担当編集者との話し合いや「都道府県立図書館にメール」したことをあげ、「おススメ」「紹介したい」図書館、については、「武蔵野プレイス」「鳥取県立図書館」の活動の特徴について述べている。

鎌倉幸子は、シャンティ国際ボランティア会の海外での活動、東日本大震災のあと、宮城県気仙沼市の図書館を訪れたこと、移動図書館については「本がどれだけあっても、それが生きるのは「人」が鍵だと感じ」「読みたい人がいて読みたい本は必ずあるので、本を巡回させようと思ったのがきっかけ」と語っている。

トークの後半では、直前に発売された『中央公論』2014年6月号の特集「消滅する市町村 523 壊死する地方都市」2)を紹介し、「消滅する市町村と図書館の役割」について、猪谷千香は、「岩手県紫波町」の紫波町図書館が施設の中に入っている「オガールプラザ」の活動が、『自治体をどう存続させるか』という視点」をもっていることを指摘する。さらに、ふたりの対話で「島根県海士町」の図書館や「船橋まるごと図書館」などの活動が語られ、今後は「図書館と広報」について、話ができたら、との発言がある。最後に、猪谷千香は「鎌倉さんもわたしも公立図書館の人間でないというところがまた面白くて」「今後ともお互いそういった視点で図書館を応援できたら」述べている。

猪谷千香、鎌倉幸子のふたりが参加したイベントとしては、この他に、2014年12月27日に、猪谷千香×鎌倉幸子×岡本真×森旭彦「図書館と地域コミュニティのこれからを語ろう！ 『未来の図書館、はじめませんか?』」3)刊行記念」が開催されている。4)

2014年を通じて、猪谷千香は、岡本真（LRG代表取締役）とおなじ会場でのイベントに参加しているケースが、複数あったが、そのうちのひとつ、猪谷千香が、図書館に関心を持つきっかけとなった、『未来をつくる図書館』の著者、菅谷明子とのトークイベントが、岡本真の司会で、2014年7月2日に「第2回LRGフォーラム」として開催され、その記録は、『LRG』2014年夏号、に掲載されている。5)

猪谷千香は「知のセーフティネットとしての図書館へ」と題した講演で、菅谷明子『未来をつくる図書館』（岩波新書）を読んで衝撃を受け、「図書館のイメージを覆すもの」だったとし、その後、2004年、ニューヨークの図書館を実際に見て、帰国後は、「ビジネス支援」に取り組む図書館取材したと述べている。また、2003年には、「図書館を取り巻く環境」が変わったとして、「長らく続いた『公共図書館の無料貸し本屋批判』を受けた、『貸出し重視から課題解決へ』の図書館サービスの移行」と、「図書館の運営を民間企業やNPOなどに任せる指定管理者制度の導入」をあげている。そのあとは、『つながる図書館』でとりあげた、武蔵野プレイス、鳥取県立図書館、伊万里市民図書館、海士町中央図書館、船橋まるごと図書館プロジェクト、武雄市図書館、などの活動を紹介している。

後半では、「私自身、一般の方に読んでほしかった」。全国の面白い図書館を知って『自

分たちの町の図書館、自分たちの都道府県立の図書館がどうあってほしいのか』ということ、住民であり、利用者であるみなさんご自身が考えてほしい。『図書館リテラシーをあげてほしい』というのが、『つながる図書館』のミッションのひとつ」と執筆意図を語っている。また、『中央公論』2014年6月号を紹介しながら、「自治体の格差」について論じ、子どもの貧困、高齢者の貧困、などの問題において、図書館が「知のセーフティネット」となり、「図書館が『知を武器』にできる市民を育てる場であってほしい」と述べている。

菅谷明子は、「未来をつくる図書館の思想」というタイトルで、『未来をつくる図書館』（岩波新書）出版までの経緯や、その後、電子書籍の普及が進む中でのアメリカの状況について紹介し、アメリカの社会における図書館の存在感について、話している。

クロストーク 菅谷明子×猪谷千香「デモクラシーの根幹と図書館」では、岡本真が司会となり、その質問にふたりがこたえる形をとっているが、分量的には、菅谷明子が話している部分が多い（この記事での、複数の発言を合計した行数は、菅谷：107行、猪谷：32行、である）。この中で、猪谷千香は、「多くの人にとって、読書というのはエンタメなんだと思う」「エンタメとして本が消費されていて、図書館もそういう場所になってしまっている」「リサーチ型、研究型の図書館の機能は県立図書館に担わせているから、市町村の図書館は差別化していいんだ、という意見もあると思いますが、やはりエンタメ以外の読書というものを、図書館から提案していただきたい」と述べている。

なお、上記の「LRGフォーラム」で司会をしていた岡本真と、猪谷千香が対談した、『つながる図書館』の「刊行記念イベント」も行われている。6)

ほかにも、猪谷千香、鎌倉幸子、の2人は、2014年に開催された、各種の図書館関係のイベントでの講演者やパネリストとして登壇した例が多数にわたり、全国規模での図書館関係イベントである、「全国図書館大会」「図書館総合展」などにも、招かれている。

猪谷千香は、「第100回全国図書館大会」の関連行事、「図書館海援隊フォーラム」2014年11月2日、で、「図書館海援隊への期待」として、糸賀雅児（慶応義塾大学教授）との対談を行っている。7)

図書館総合展とのかかわりに関して、猪谷千香は、2013年第15回図書館総合展で、フォーラム“武雄市図書館”を検証する」を全文公開したことが、図書館界で注目を集めるきっかけのひとつとなった。8)2014年第16回図書館総合展では、パシフィコ横浜での開催期間（11月5日～7日）前に、関連行事として、11月4日に行われた、フォーラム「教育委員会制度改革を問う 図書館は『教育』にとどまるのか？」で、猪谷千香は、5人の登壇者のひとりとなっている。司会は糸賀雅児（慶応義塾大学教授）であった。9)第16回図書館総合展開催期間中のフォーラムでは、11月5日「共に考える国立国会図書館の未来」で、猪谷千香は、大滝則忠（国立国会図書館長）と対談を行い、10)11月7日「猪谷千香氏が語る神奈川県立図書館・県立川崎図書館問題」では、講師として、登壇している。11)

このほかに、猪谷千香は、全国規模の団体である「図書館問題研究会」の研究集会と同時開催イベントで講演（2015年2月16日）している。12)また、地域で開催されたイベン

トでも「世田谷教育推進会議『世田谷発～これからの魅力ある図書館をめざして』」2014年8月9日(土)「シンポジウム これからの魅力ある図書館をめざして」では、片山善博(元鳥取県知事・元総務大臣・慶應義塾大学法学部教授)、糸賀雅児(慶應義塾大学教授)、保坂展人(世田谷区長)、とともに、登壇者となっている。13)

鎌倉幸子は、「1973年青森県生まれ。8年間シャンティ国際ボランティア会カンボジア事務所での出版、図書館活動に従事。東日本大震災直後に岩手県に入り、移動図書館事業を立ち上げた。現在、東日本大震災図書館事業のアドバイザー兼シャンティ国際ボランティア会広報課長(裏カバー)「被災者の心の回復のために「本」を届ける移動図書館プロジェクトが東日本大震災直後に立ち上げられた。本のチカラを信じて行われたボランティア活動の誕生から現在までを綴る」(裏表紙カバー)14)と著書に表示されているように、海外での図書館活動実践を経て、東日本大震災後、現地に入り、移動図書館による活動を行ってきている。

そうした経緯については、2011年3月11日の東日本大震災から約8か月後に開催された、2011年第13回図書館総合展で、「L-1 グランプリ 2011 東日本大震災に向き合うとき」に応募し、「走る移動図書館プロジェクト」のメンバーとしてプレゼンテーションを行って優勝し、2012年開催の「第14回図書館総合展でのフォーラム開催権(50万円相当)」を授与されている。15)

翌年、2012年第14回図書館総合展フォーラムでは、11月22日に「いわてを走る移動図書館プロジェクト 活動報告と今後の展望—1年を振り返り、これからの被災地で求められる図書サービスとは」を実施している。16)

また、2013年第15回図書館総合展では、参加者、出展者としてかかわった、図書館総合展について、出展しようと思ったきっかけ、印象的な出来事、出展するうえで気をつけたこと、出展して感じたこと、などの点についてインタビューにこたえている。17)

2014年第16回図書館総合展では、11月6日「これからの福島の図書館を考える(第2部)避難指定区域の住民を受け入れている自治体の図書館について」で、福島県内(福島県立、会津若松市、いわき市)の図書館員が講師となっているフォーラムで、鎌倉幸子は司会を担当している。18)

さらに、2014年第100回全国図書館大会第4分科会公共図書館第3分散会「市民とつくる図書館」で、報告「声を集めて生まれた移動図書館プロジェクト」を行っている。19)

地域でのイベントでも、たとえば、瀬戸内市では「著者に聞きたい!第1弾 鎌倉幸子講演会『走れ!移動図書館 本でよりそう復興支援』」において講演している。20)

これらのイベントの中で、とくに、猪谷千香は、岡本真(アカデミック・リソース・ガイド代表取締役)、糸賀雅児(慶應義塾大学教授)と、同じ会場で登壇する機会が比較的多かったといえよう。21)

注)

1) 猪谷千香、鎌倉幸子 トークイベント「図書館のこれからを語る」2014年6月25日
18:30開演、紀伊國屋書店新宿本店8階イベントスペース、参加料：1,000円

(<http://kinokuniya.co.jp/c/store/Shinjuku-Main-Store/20140531100005.html>)

シャンティのHPでは、「これからの図書館について語ろう」と表記されている。

(<http://sva.or.jp/wp/?dialogue=4-1>)

(<http://sva.or.jp/wp/?dialogue=4-2>)

(<http://sva.or.jp/wp/?dialogue=4-3>)

(<http://sva.or.jp/wp/?dialogue=4-4>)

なお、シャンティのHPでは、まちとしょテラス（小布施町立図書館）前館長・花井裕一郎と鎌倉幸子の対談「記憶を記録として残す」が公開されている。

(<http://sva.or.jp/wp/?dialogue=1>)

(<http://sva.or.jp/wp/?dialogue=2>)

(<http://sva.or.jp/wp/?dialogue=3>)

(<http://sva.or.jp/wp/?dialogue=4>)

(<http://sva.or.jp/wp/?dialogue=5>)

また、同様に、コミック『図書館の主』の作者、漫画家・篠田ウミハルと鎌倉幸子の対談「いいなと思った図書館には、それをつくった司書がいる」が公開されている。

(<http://sva.or.jp/wp/?dialogue=3-1>)

(<http://sva.or.jp/wp/?dialogue=3-2>)

2)「緊急特集 消滅する市町村 523 壊死する地方都市」『中央公論』2014年6月号、pp.17-43、
として、以下の記事が掲載されている。

増田寛也＋日本創生会議・人口減少問題検討分科会「提言ストップ『人口急減社会』」
pp.18-31

「消滅可能性都市 896 全リストの衝撃 523 は人口1万人以下」 pp.32-43

3)岡本真、森旭彦『未来の図書館、はじめませんか?』青弓社、2014

なお、この本の書評が『出版ニュース』に掲載されている。

山本昭和「ブックハンティング 2015 岡本真、森旭彦著『未来の図書館、はじめませんか?』」『出版ニュース』2015年1月上・中旬号、pp.76-77

4) 猪谷千香×鎌倉幸子×岡本真×森旭彦「図書館と地域コミュニティのこれからを語ろう! 『未来の図書館、はじめませんか?』刊行記念」2014年12月27日、本屋B&B（世田谷区北沢2-12-4）2F、前売/席確保 1500yen+500yen/1drink

(http://bookandbeer.com/blog/event/20141227_a_toshokan/)

なお、同じ会場では、下記のイベントが開催されている。

猪谷千香×仲俣暁生×内沼晋太郎「図書館はコミュニティの核になるか 『つながる図書館』(ちくま新書) 刊行記念」2014年1月15日、本屋B&B（世田谷区北沢2-12-4）2F、前売/席確保 1500yen+500yen/1drink

所属は、内沼晋太郎 (B&B)、仲俣暁生 (『マガジン航』編集人) と記されている
(http://bookandbeer.com/blog/event/20140115_bt/)

5)「第2回 LRG フォーラム 菅谷明子×猪谷千香 クロストークを7月2日(水)に開催」
19時開始、21時終了予定、会場：リクルートテクノロジーズ「アカデミーホール」、料金：
無料

(<http://www.arg.ne.jp/node/7522>)

『LRG (ライブラリー・リソース・ガイド』vol.8、2014 夏号、pp.7-55、には、上記の
フォーラムの記録が、「菅谷明子×猪谷千香 クロストーク 社会インフラとしての図書館
—日本から、アメリカから」として掲載されている。

講師紹介 p.9

岡本真「はじめに」 p.10

猪谷千香「知のセーフティネットとしての図書館へ」 pp.11-27

菅谷明子「未来をつくる図書館の思想」 pp.30-45

菅谷明子×猪谷千香「デモクラシーの根幹と図書館」 pp.46-53

なお、会場でトークを聞いていたがわからのコメントが附されている。

仲俣暁生 (『マガジン航』編集人)「図書館を『主語』から『動詞』へ」 pp.54-55

(写真のみのページなど、記事の中に含まれないページが存在する)

6)猪谷千香『つながる図書館 コミュニティの核をめざす試み』筑摩書房 (ちくま新書)、
2014.1 刊行記念イベント「猪谷千香×岡本真『これからの図書館を考えてみよう』—『つ
ながる図書館』刊行記念 @sisiodoc @arg」会場 ゲンロンカフェ 2014.2.16 19:00-21:00、
前売 2500 円 (1 ドリンク付き) 当日券は 3000 円

(<http://peatix.com/event/26378>)

7)第100回全国図書館大会関連行事「図書館海援隊フォーラム」2014年11月2日 対談
その3「図書館海援隊への期待」(猪谷千香『つながる図書館』) 著者 v s 糸賀雅児 (慶応義
塾大学教授) 千代田区立日比谷図書文化館コンベンションホール

『第100回全国図書館大会東京大会・大会要綱』 pp.389-390

8) (http://huffintonpost.jp/2013/10/31/takeol_n_4186089.html)

『つながる図書館』の書評の中には、「図書館総合展『“武雄市図書館”を検証する』全
文のネット公開で著者を知り」(蓑田明子『みんなの図書館』no.445、2014.5、p.34)とい
う記述もあった。

9)第16回図書館総合展関連行事 2014年11月4日「教育委員会制度改革を問う 図書館は
『教育』にとどまるのか？」

猪谷千香 (ハフントンポスト日本版記者/文筆家) は、5人の登壇者の一人。司会は糸
賀雅児 (慶応義塾大学教授)。

『第16回図書館総合展 ガイドブック』 p.5、p.12

猪谷千香「特集 教育委員会制度の改革」『LRG (ライブラリー・リソース・ガイド』vol.8、

2014 夏号、pp.57-95、で、猪谷千香は、下記の 4 人にインタビューを行っている。

猪谷千香「教育委員会制度の改革と図書館への影響」 pp.58-59

特集のための資料 pp.60-61

新藤宗幸（千葉大学名誉教授）「変革の中で問う 教育の根幹とは？」 pp.62-69

糸賀雅児（慶応義塾大学教授）「変革の中で問う これからの図書館、司書の姿」 pp.70-77

嶋津隆文（田原市教育委員会）「変革の中で問う 真の地方分権とは？」 pp.78-85

新出（白河市立図書館）「変革の中で問う 図書館のガバナンスはどうあるべきか？」
pp.86-95

嶋津隆文は、上記フォーラム「教育委員会制度の改革を問う」で登壇者となっている。

10) 第 16 回図書館総合展 2014 年 11 月 5 日「共に考える 国立国会図書館の未来」対談：大滝則忠（国立国会図書館長）猪谷千香（ハフィントンポスト日本版記者/文筆家）

『第 16 回図書館総合展 ガイドブック』 p.12

11) 第 16 回図書館総合展 2014 年 11 月 7 日「猪谷千香氏が語る神奈川県立図書館・県立川崎図書館問題」講師：猪谷千香（ハフィントンポスト日本版記者/文筆家）

『第 16 回図書館総合展 ガイドブック』 p.16

12) 図書館問題研究会第 41 回研究集会 in 成田 同時開催「ジャーナリストからみた図書館の未来 猪谷千香さん講演会」2015 年 2 月 16 日（月）『つながる図書館』著者の猪谷千香さんが図書館の未来について語ります。

(<http://tomonken.sakura.ne.jp/tomonken/meeting/kenkyu/41-2/>)

13) 「世田谷教育推進会議『世田谷発～これからの魅力ある図書館をめざして』」2014 年 8 月 9 日（土）「シンポジウム これからの魅力ある図書館をめざして」片山善博（元鳥取県知事・元総務大臣・慶応義塾大学法学部教授）、糸賀雅児（慶応義塾大学教授）、猪谷千香（ジャーナリスト）、保坂展人（世田谷区長）、国士舘大学多目的ホール

(<http://www.city.setagaya.lg.jp/kurashi/107/162/1816/d00137140.html>)

14) 鎌倉幸子『走れ！移動図書館 本でよりそう復興支援』筑摩書房(ちくまプリマー新書)、2014.1.10

15) (<http://2011.libraryfair.jp/node/283>)

16) (<http://2012.libraryfair.jp/node/908>)

17) (<http://2013.libraryfair.jp/node/1288>)

18) 『第 16 回図書館総合展 ガイドブック』 p.15

(<http://2014.libraryfair.jp/node/2120>)

なお、2014 年 3 月 3 日に開催された「図書館総合展フォーラム 2014 in 白河」で、「パネル討論 1 東日本大震災と福島一震災後の情報提供」において、鎌倉幸子が、司会を担当している。

(<http://2013.libraryfair.jp/node/1977>)

また、2015 年 3 月 14 日開催（予定）の「図書館総合展フォーラム 2015 in 一関」では、

「パネル討論 1 東日本大震災と岩手—図書館の復旧と復興支援」において、鎌倉幸子が司会の担当となっている。

(<http://www.libraryfair.jp/node/2474>)

19)2014 年第 100 回全国図書館大会第 4 分科会公共図書館第 3 分散会「市民とつくる図書館」報告「声を集めて生まれた移動図書館プロジェクト」鎌倉幸子

『第 100 回全国図書館大会東京大会・大会要綱』 pp.61-62

20) 瀬戸内市立図書館「著者に聞きたい！第 1 弾 鎌倉幸子講演会『走れ！移動図書館 本でよりそう復興支援』」

(<http://lib.city.setouchi.lg.jp/ivent.html>)

なお、鎌倉幸子が「報告」を行った、2014 年第 100 回全国図書館大会第 4 分科会公共図書館第 3 分散会では、嶋田学（瀬戸内市新図書館開設準備室）が、基調講演「地域に寄り添う図書館サービスとは～持ち寄り・見つけ・分け合う広場をめざして」をしている。

『第 100 回全国図書館大会東京大会・大会要綱』 pp.58-60

21)開催日付と、参加（○）状況を、示した。

●猪谷千香・鎌倉幸子の両者が参加したもの

日付	猪谷	鎌倉	岡本	糸賀	他の参加者
06.25	○	○	—	—	
12.27	○	○	○	—	森旭彦『未来の図書館、はじめませんか?』の共著者

●猪谷千香が参加したもので、岡本真・糸賀雅児、のいずれかが参加したもの

日付	猪谷	鎌倉	岡本	糸賀	他の参加者
02.16	○	—	○	—	
07.02	○	—	○	—	菅谷明子『未来をつくる図書館』
08.09	○	—	—	○	片山慶大教授 保坂世田谷区長
11.02	○	—	—	○	
11.04	○	—	—	○	

それぞれの日付に開催されたイベントについて、再掲する（タイトル中の個人名は省略）。

06.25 トークイベント「これからの図書館について語ろう」

12.27 「図書館と地域コミュニティのこれからの語ろう！『未来の図書館、はじめませんか?』刊行記念」

02.16 『つながる図書館』「刊行記念イベント」

07.02 第 2 回 LRG フォーラム 「クロストーク 社会インフラとしての図書館—日本から、アメリカから」

08.09 「世田谷発～これからの魅力ある図書館をめざして」

11.02 第 100 回全国図書館大会関連行事「図書館海援隊フォーラム」対談その 3「図書館海援隊への期待」

11.04 第 16 回図書館総合展関連行事「教育委員会制度改革を問う 図書館は『教育』にとどまるのか？」

2014 年第 16 回図書館総合展で、糸賀雅児、岡本真、の両氏が同一のフォーラムに参加しているケースは、11 月 6 日「キハラ（株）100 年記念フォーラム 第二部『図書館の永続的発展に向けて』～図書館は何処へ行く～」において、講師：糸賀雅児、司会：岡本真、を、それぞれ担当している。

『第 16 回図書館総合展 ガイドブック』p.15

猪谷千香『つながる図書館』『あとがき』では、「図書館について素晴らしい知見を授けてくださった方々」として、「慶應義塾大学の糸賀雅児先生、国立国会図書館の柳与志夫先生、アカデミック・リソース・ガイドの岡本真さん」(p.237) が、あげられている。

4. おわりに

一昨年・昨年と、本誌では、宮田昇『図書館に通う』1)について、扱ってきた。2)月刊誌『みすず』にはほぼ隔月で連載され、連載終了のあと、約半年で、単行本として刊行された。『朝日新聞』『毎日新聞』『東京新聞』に書評が、月刊『文藝春秋』には著者のインタビューが掲載されたが、図書館界での反響は、今回の 2 冊に対するほどではなかった。

『つながる図書館』『走れ！移動図書館』は、著書の刊行は、2014 年 1 月 10 日であるが、それ以前に、すでに、著者である、猪谷千香、鎌倉幸子の存在は図書館界でも知られていた。猪谷千香は、2013 年第 15 回図書館総合展で開催された、フォーラム「“武雄市図書館”を検証する」の全文をネット公開したことで注目され、鎌倉幸子は、2011 年第 13 回図書館総合展「L-1 グランプリ」で優勝し、その後も、毎年、図書館総合展に出展者などの立場で、かかわってきていた。

ただ、ふたりの状況には、違いも存在する。同じ媒体（『出版ニュース』）で、『つながる図書館』『走れ！移動図書館』について、書評を執筆した、嶋田学の表現も、微妙に異なっている（本稿「2. 新聞・雑誌の書評とインタビュー」参照）。鎌倉幸子は、実践者であり、海外の難民キャンプや東日本大震災後のきびしい環境で、移動図書館による活動を行ってきている。発表・司会等を担当しているのは、ほとんどが、震災と図書館に関連するテーマを扱った会合・フォーラムであることから、図書館界では敬意をもって受け止められていると思われる。

猪谷千香は、図書館を利用する立場でもあったが、ジャーナリストとして取材にあたり、著書の発表後、2014 年第 15 回図書館総合展では、教育委員会制度、国立国会図書館、神奈川県立図書館、など、さまざまなテーマに関係したフォーラムで発言を行っている。団体を構成するメンバーの異なる「全国図書館大会」（日本図書館協会）や、「図書館問題研究会研究集会」（図書館問題研究会）などの関連行事や各地域で開催されるイベントなどにも招聘されているということは、それだけ注目が集まり、図書館界で一定の支持を得ているといえよう。では、先に扱ってきた、『図書館に通う』の著者、宮田昇とは、何が違って

いたのか。さまざまな違いはあるが、たとえば、「無料貸本屋」という言葉に対する扱ひもそのひとつではないか。

宮田昇『図書館に通う』の末尾には、「書籍の売上げ低下は、図書館のせいにしてはならない。図書館は、『公立無料貸本屋』であってよいばかりか、いま、いっそうの充実が求められているインフラでもある」(p.235)と書かれている部分がある。しかし、宮田昇が、「図書館は貸出をしていればいい」と考えているということではない。『図書館に通う』の中で、図書館の多様な活動にも言及していることは、本誌の前号でもふれた。

一方、猪谷千香『つながる図書館』では、「あとがき」で、「ただの『無料貸本屋』ではない公共図書館の姿を知っていただければと考えた」(p.236)と述べている。また、猪谷千香は、鎌倉幸子とのトークイベントで、2003年には、「図書館を取り巻く環境」が変わったとして、「長らく続いた『公共図書館の無料貸し本屋批判』を受けた、『貸出し重視から課題解決へ』の図書館サービスの移行」をあげている。さらに、菅谷明子とのクロストークでは「多くの人にとって、読書というのはエンタメなんだと思う」「エンタメとして本が消費されていて、図書館もそういう場所になってしまっている」「リサーチ型、研究型の図書館の機能は県立図書館に担わせているから、市町村の図書館は差別化していいんだ、という意見もあると思いますが、やはりエンタメ以外の読書というものを、図書館から提案していただきたい」と述べている。3)こうした点が、現在の図書館職員や図書館に関心のある市民に、支持される要素のひとつになっているのではないか。

ただ、猪谷千香が鎌倉幸子とのトークイベントにおいて、消滅する市町村と図書館の関連で紹介している、「岩手県紫波町図書館」はNHKのテレビ番組で紹介され、4)図書館界でも関心を集めており、「農業支援サービス」が注目されているが、資料の利用も多く、多様なサービスが展開されている施設でもある。5)

注)

1)宮田昇『図書館に通う』みすず書房、2013.5

なお、宮田昇は、2014年2月5日、立川市女性総合センターで開催された、「平成25年度多摩地域図書館大会『図書館サービスのこれから—図書館職員の専門性とその役割』」において、「図書館に通う—公立図書館のさらなる普及・充実のために」というタイトルで、講演を行っていることが、日本図書館協会HPの「図書館イベントカレンダー」で確認できる。

(<http://www.jla.or.jp/calender/tahid/92/pageno/13/Default.aspx>)

2) 佐藤毅彦「『図書館に通う』(宮田昇)では、図書館についてどのように言及されているか」『甲南国文』vol.60、2013.3、pp.21-33

佐藤毅彦「『図書館に通う』(宮田昇)では、図書館についてどのように言及されているか・続」『甲南国文』vol.61、2014.3、pp.1-14

3)先に示したように、田井郁久雄は、「無料貸本屋」という言葉の「意味の曖昧さ」を指摘し、批判している。

田井郁久雄『つながる図書館』と「(図書館) 無料貸本屋」批判『談論風発』vol.9、no.1、2014.5、pp.10-14

4)紫波町図書館

(<http://lib.town.shiwa.iwate.jp/>)

読書週間（2014年10月27日～11月9日）の期間中、NHKの朝の情報番組（『おはよう日本』『あさイチ』『サキどり』）で、図書館がとりあげられたが、「紫波町図書館」は、NHK『おはよう日本』2014年11月4日「変わる図書館 利用者増加の秘密は…」の中で紹介された。

(<http://www.nhk.or.jp/ohayou/marugoto/2014/11/1104.html>)

また、2015年1月5日に、NHK『クローズアップ現代』「地方から日本を変える① まちを潤す“にぎわい革命”」が放送され、「海士町（島根県）中央図書館」「紫波町図書館」が紹介された。

(http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail_3594.html)

5)『図書館調査研究レポートNo.15 地域活性化志向の公共図書館における経営に関する調査研究』国立国会図書館、2014

「第3章 農業支援サービス事始め」pp.27-65、で、「紫波町図書館」が扱われている。

「(開館日 H24/8/31～H258/31)」の「図書館データ」として、「蔵書数：74,580冊、登録者数：9,144人、貸出冊数：247,154冊、来館者数：227,527人（774人/日）」(p.32)であったことが、示されている。

工藤巧「オガールと共にオガル紫波町図書館 特集★トピックスで追う図書館とその周辺」『図書館雑誌』vol.109、no.2、pp.92-93

「蔵書に占める児童書の割合が25%に対して、児童書の貸出の割合は47%（2013年度）」であることや、多様な展示・イベントの実施について、紹介されている。

(本文中で参照したwebページは、2015年2月の時点で公開されていたものです)